

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
DIGITAL
2015

2015 SUPER GT Rd.7 AUTOPOLIS
BRIGHT FUTURE AHEAD
「曇天の隙間に見えた光明」

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project



「気温14度、路面温度は18度です」

決勝を前に、佐藤真治エンジニアの無線が響いた。

11月を迎え、“火の国”熊本を象徴する阿蘇にほど近いオートポリスはいよいよ肌寒さを増している。ARTAの面々も真新しい厚手のジャケットを羽織り、間もなく始まろうとする戦いに臨んでいる。9月の噴火でこの大会の開催が危ぶまれもしたが、今のところ阿蘇の火は落ち着きを取り戻している。

空はいつ雨が降り出してもおかしくないような曇天。

しかしそれはGT500クラスを戦う8号車ARTA NSX CONCEPT-GTにとっては望むところだった。ドライではグリップ不足とアンダーステアに苦しんでいるが、ウェットコンディションでの速さには自信があったからだ。

「雨雲は午後3時から4時の間に上空を通過しそうな感じです」

GT300クラスの55号車ARTA CR-Z GTを担当するレースエンジニアの一瀬俊浩が伝える。ARTA CR-Z GTは昨年のここオートポリスの覇者でもある。

3番グリッドの55号車は高木真一、そして13番グリッドの8号車は野尻智紀がステアリングを握り、スタートの瞬間を迎えた。



「トップ3台だけが速くて、それ以下は野尻と同じようなタイムだから。

これから300が絡んでくるからね」

序盤は様子を窺っていた野尻だが、GT300クラスのトラフィックが絡んできた9周目前後からプッシュを始めた。

「ポジション11。タイヤの状況はどう？」

「やっぱりアンダーが出るよ。フロントがキツいね」

野尻と佐藤エンジニアのやりとりを聞いていた鈴木亜久里監督が、「みんな厳しいって言ってやれよ」と割って入る。

低温のグリップ不足の中で我慢しながら走っているのはどのチームも同じなのだ。

「野尻、タイヤはみんな厳しいからね。みんな同じタイヤだから。

ペースは悪くないよ」



その声に後押しされたかのように、野尻は次々とポジションを上げていき、佐藤から野尻へと順位を伝える数字は「ポジション11」から10、9、8と小さくなっていく。

「ミニマムまであと10周。タイヤはどんな感じ？」

「スーパーアンダー、それだけです」「3コーナー先で雨が降っているという情報もあるんで、気をつけて。ピックアップはどう？」「あるよ、すげえあるよ！」

「取れないってこと？」「取れやしないよ！ずっとグニュグニュしてるよ」それでも野尻は果敢に攻め続け、21周目にはなんと7番手まで浮上してきた。

「雨降ってくれるかな……？」

さらなる浮上を狙う野尻がそう呟いたところ、まさに天は恵みの雨を落とし始めた。

「雨が来てるよ！雨！ペースはこっちで管理するから、そのまま行って！」

「オッケー！」願ってもないこの展開に、亜久里監督のテンションも上がる。



「ギリギリまで引っ張ろうぜ！ どうなるか分かんないから！ バーツと降って来ちゃうかもしれないから！」

佐藤もそれに同意し、野尻にできるだけ長くコース上に留まるように伝える。

「ピットウインドウに入ってるけど、タイヤが温まったままだから、ペースが落ちるまでドライタイヤで引っ張るよ。ペースもかなり良い方だよ。

トップのペースと変わらない」

「どっかのポイントですごい雨が降ってきたらちゃんと教えてね！」 「了解、了解」
勢いに乗る野尻は、攻めに攻めた。前の6番手とはタイム差があるものの、この後の戦略で大きく浮上するチャンスも充分にありそうだったからだ。

しかし33周目、まさかのシーンがモニター上に飛び込んできた。

濡れ始めた路面に足を掬われてコースオフし、身動きが取れなくなっている8号車の姿だった。

「バックギアが入らない！」

野尻の声にも焦りの色が滲んでいた。

「野尻、動けそう？」

なんとかギアをリバースに入れ、コースへと戻った時にはもう最後尾まで落ちていた。



「スイマセン、動き出しました。ピットに入るよ！」

ピットへと戻り、タイヤ交換と給油、そして松浦孝亮へとドライバーチェンジを行なったが、野尻は良い走りができたこととレースを台無しにしてしまったことの両方が入り混じった複雑な表情を見せた。



「途中まではどんどん抜いていく事が出来ましたし、300クラスの抜き方も抜くタイミングや抜く場所も計算しながら出来たので、とても良いレースが出来たと思います。しかし、ドライバー交代前にもう少しプッシュしようと思ったらコースアウトしてしまいました。自分のミスで作戦も台無しになってしまったので、反省していますが、攻める姿勢は変えずにこれからもチャレンジしていきたいです」

その野尻の走りは松浦も「今年のベストレース」と褒め称えた。

一方、GT300クラスでは予選2位のマシンがトラブルに見舞われたため実質的に2番手でスタートすることができたARTA CR-Z GTの高木は、巧みなペースコントロールでそのポジションを守っていた。



「3番手以降は8台がダンゴになってます。47秒5以下で走ってます」

GT300クラスを戦う上で難しいのは、GT500のマシンにいかに上手く“抜かれる”かという点だ。遭遇する場所によっては進路を譲らねばならず、レーシングラインの外に積もったタイヤカスの上を走らなければならないこともある。

「タイヤカスが付いてきたよ〜！」



「なんとか取ってくださいね」「スゴいな、ズルズルや。大変やで、これは！」

なぜか関西弁で言う高木だったが、そのくらい尋常ではないということなのだろう。

ピックアップを拾ってしまったタイヤは一気にグリップ感を失ってしまうのだ。

「3コーナーは真ん中から左側は絶対に使うな、タイヤカスだらけ！」

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市がすかさず高木に指示を送る。

「真一、頑張るねえ～」

そういっておどけながらも土屋は

高木の走りを褒める。

「雨だよ～、雨が降ってきてるよ～！」

高木からの無線に、土屋が檄を飛ばす。

「踏ん張れよ、真一！」

「いつでも入れるようにしといてよ！」

「真一、頑張れ。みんな51秒、52秒台だ。

49秒台で走ってるのは4台だけだ」



しかし8号車がコースオフし緊急ピットインを強いられた直後、55号車も緊急事態に直面していた。これまでも何度か襲われた、ガス欠の症状が出てしまったのだ。

「入って良い!? ガソリンなくなった！」高木からの無線が飛び込んできた。

「今どこ!？」

「今ピットを通過したところ。最終コーナーで警告が出た。これ、1周保つ？
全開で行っても大丈夫？」 「ちょっと抑えてください！」

「シフトの時にいつもの症状が出始めてる。雨も強くなってる」
37周目、4番手まで落ちた高木がピットに飛び込み、小林崇志にドライバーチェンジ
する。タイヤは無交換でピットストップの時間を短縮。

寒いこのコンディションでは、温まったタイヤで走り続けるというメリットもある。
しかし、タイヤの摩耗は決して楽ではない。

「これ、プッシュする？ タイヤは保たせなくてもいい？ それとも保たせて速く
走る？」 コースインして早々に、小林が一瀬に無線で問い掛ける。



「タイヤは多分ギリギリだから、保たせるようにして」

「フロント？」 「左の外側と、左リアも」 そこに土屋もアドバイスを送る。

「ペース的には49秒真ん中から後半で走ってくれるとタイヤは保つ」



「ホントに？ それ結構速くない？（苦笑）」 「雨が来るから、心配するな！」

ピットストップの間に一旦は5位に後退したものの、小林は51周目までに表彰台圏内の3位まで浮上してきた。タイヤを保たせながらもペースは落とせない、ギリギリの走りが要求されていた。「ツライ！」

「了解、なんとか頑張っ。あと15周」 「ターン2～3でちょっと息継ぎした！」

周回を重ねるとタイヤの摩耗が進み、ガス欠症状も出始めた。

同じように無交換で行ったのか、バーストに見舞われるマシンも出て来た。

「1コーナー先のアウト側でロータスがバーストしています」「すごい……」

レース終盤を迎えて、小林のタイヤも限界を迎えていた。

タイヤを保たせるために、無理な防戦はできない。少しずつ順位は下がっていく。

「完全に左フロントが死んじゃった」「了解。あと3周だから頑張って」

「57秒台までなら落としても大丈夫だから。タイヤを保たせてね」「了解！」

そしてなんとか6位でチェッカーを受け、土屋からねぎらいの言葉を受けた小林はホッと安堵の声を出した。

「お疲れさん、小林。6番手でチェッカー。よくタイヤ保たせた。頑張ったな！」



「いやあ〜、ツラかった。ずっとフロントがゴリゴリ言っていて、いつバーストするか恐かった、ホントに……」まさに、死力を出し尽くしたレースだった。

前戦菅生では厳しい言葉をぶつけた土屋も、チームの奮戦を賞賛した。

「ここでは勝つか表彰台には登りたかったんだけど、チームは見事に車をととても良いバランスに仕上げてくれたし、ドライバーはタイヤ無交換でとにかく頑張ってくれて、レースの内容はとても良かったんじゃないかと思うよ」



一方、野尻から8号車のステアリングを託された松浦は、序盤に野尻が見せたマシンの仕上がりの良さを証明するかのようプッシュを続けた。

「コースケ、野尻のタイヤは右側の前後にピックアップがあった。さっきのラップ、セクター1、2はベストだよ」

「セクター3ですごいひっかかっちゃったんだよ」 予報通り、雨脚は強まってきた。2周遅れの最後尾ではあるが、ペースはトップと遜色ない。

こちらは周回遅れのはずなのに、逆に前にいるトップランナーとのギャップが縮まっていくのだ。



「残り5周。ペースは上位と同じくらいで走ってます」

「トップに追い付いていってるんだけど、どうしよう!？」

「残り3周、前には追い付けそうにないので、無理して抜かなくても大丈夫です。」

ついていってください」

このペースが同一周回の争いで発揮できていれば……。チーム全員が悔しい思いでモニターを見詰めていた。状況は変わりようもなく、14位でチェッカー。



松浦は悔しそうに言った。

「もうちょっと雨が降ってくればダントツに速かったんだけどな。もうちょっと降ると思ったんだけど。レースだったら最後の数周でインパルを抜けてたね」

ARTAを長く覆っている曇天は晴れることなく、降雨も恵みの雨とはならなかった。

しかし、このオートポリスでの戦いはその結果を遥かに凌ぐ光明に包まれていた。

「残念の一言だけど、クルマのバランスが飛躍的に向上して、長いトンネルから

抜け出せた感じ。今までも悪くなかったんだけど、安定性が無かった。

最終戦はフリー走行から良い所を見せたいと思っているよ」

亜久里監督は、そう言ってオートポリスを後にした。



次はいよいよ今シーズンの最終戦。1年の最後に光明で目の前を照らし出し、結果を掴み取らなければならない。

この1年間、届きそうで届かなかった場所へと、いよいよ手を伸ばすのだ。



RESULT

GT500



ARTA NSX CONCEPT-GT NO.8 松浦 孝亮 / 野尻 智紀

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
13位	14位	3Laps	1'37.833	14位

GT300



ARTA CR-Z GT NO.55 高木 貞一 / 小林 崇志

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
3位	6位	1'05.335	1'46.282	7位

クルマをもっと楽しむために

モータースポーツ&カーライフ

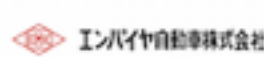
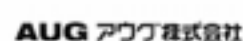
モータースポーツを“観て”“知って”“体験する”私たちamscはモータースポーツの応援を通してスポーツが持つ夢・あこがれ・感動を体感し、豊かなクルマ社会の創造と発展に貢献してまいります。



AUTOBACS Motorsports Conference

オートバックス モータースポーツ連絡協議会

[amsc参加企業]



株式会社アスコット 株式会社アネブル 安全自動車株式会社 株式会社イササカ 株式会社ウェッズ Fデザインオフィス オカモト産業株式会社 コアーズインターナショナル株式会社
株式会社サンコー 株式会社サンテック 株式会社ジーエス・ユアサバッテリー 株式会社湘南レオテック 東京工科大学自動車大学校 日星工業株式会社 株式会社バンザイ
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン ブリッド株式会社 株式会社ホットスタッフコーポレーション マルカサービス株式会社 三菱重工業株式会社 株式会社ユビテル 株式会社ワッツ

2015年3月2日現在会員企業

amsc (AUTOBACS Motorsports Conference) とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたくと考えております。



Thank You for Supporting
Samantha Thavasa Japan Limited
Calm Flower
ARTA GALS



株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL
Youtubeチャンネル

To be continued next race.....

ZERO_{BORDER}
Team ZEROBORDER

Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA
Text : Mineoki YONEYA
Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD